

## 関東平野ローカル線の旅 &lt;続々篇&gt;

## ～鹿島臨海鉄道大洗鹿島線の旅～

霞ヶ浦の東側にある北浦の東側、鹿島神宮から鹿島灘に沿って北上して常磐線の水戸駅につながる鉄道が「鹿島臨海鉄道大洗鹿島線」である。国鉄時代の鹿島線が臨海工業地帯のコンテナ輸送に使われていた鹿島臨海鉄道に移管されてできた鉄道のようなのだ。地図上で見ると、北浦・涸沼の横を走っていたり、鹿島灘に沿って走っていたりで車窓の景色としてどんなものが見えるのだろうかとか色々想像してきた。一度乗って見たいと思ってはいたが、沿線に鹿島サッカースタジアムがあるので、サッカーの試合がある時には行かない方がいいのではないかと、機会を狙っていた。

年の瀬も押し詰まった12月27日は雲ひとつない快晴。旅は千葉駅から始まった。

通勤のラッシュアワーは終わり学校ももう休みに入り、プラットホームはいつもの朝のような混雑はない。始発の電車、9時34分発鹿島神宮行に乗車。席を取るために焦る必要もないのがいい。

東千葉・都賀・四街道と進むにつれて車窓の景色は田園風景に変わっていく。この変化が面白い。

四街道を過ぎると急に田圃と畑とその後ろに控える低い山、つまり里山風景が広がってくる。収穫を終えた田圃はすっかり色づいたひこばえに覆われていかにも冬らしい。連なる田圃の上には何本もの高圧線の鉄塔と幾重にも重なる送電線の交差。

成田を過ぎると田圃の連なりもかなりの奥行に広がっていく。

香取を過ぎて利根川を渡ると景色は一変して水辺の景色になる。利根川を渡り与田浦のほとりの十二橋、常陸利根川を渡ると潮来、前川を跨いでしばらくすると右に大きくカーブする。いくつもの流れを横切る様子を撮影しようと思ってカメラを出し始めたら、隣の席のおちゃんが話しかけてきた。

「ご旅行ですか?」「いや、散歩ってところですかね」「どちらからお出ですか?」「千葉です、近くの散歩と言う感じで、旅行と言うほどのことでも・・・」

「私も旅行です、大阪から来たんです。香取神宮と鹿島神宮と銚子にある坂東の札所になっている寺へ行こうと思って・・・」

話を聴いている内に水郷風景は遠くへ去り、写真は一枚しか撮れなかった。

延方の駅を過ぎて北浦を渡り、11時06分終点の鹿島神宮駅に到着。昼飯にはちょっと早いし、鹿島臨海鉄道の出発にはまだ時間があるので、鹿島神宮を早足で参拝することにした。(右写真：鹿島神宮楼門)



11時43分発大洗行は一両だけのワンマン運転のディーゼルカー。

**鹿島神宮駅**を出発してしばらくすると比較的新しい家が立ち並ぶ集落と樹林帯との間を切り裂くように走っていく。

**鹿島スタジアム**、今日はサッカーの試合がないので停車しない。

その昔この辺りには北鹿島駅があり、臨海工業地帯から来る貨物線の鹿島臨港線が合流していたらしい。

**荒野台(こうやだい)**、明るい青空と移住した人の家だろうか新しい

家が目立つ。おそらく一昔前には「荒野の中の一軒家」のような駅だったに違いない。気をつけて眺めると、所々にひときわ高く立派な瓦を積んだ大きな家が建っている。移住者に土地を売って財をなした大地主の家ではないかと思う。

長者ヶ浜潮騒はまなす公園前、何故あってこのように長い名前の駅名にしたのだろうか。昔「東京競馬場前」という駅名が長い名前の駅名として有名だったが、近頃はこの手の駅名は沢山ある。大阪の地下鉄には「四天王寺前夕陽ヶ丘」という駅があった。いずれにせよ命名した人のセンスを疑いたくなる。



鹿島大野 (かしまおおの)、駅前に店は一軒もなくただ大きな駐車場があるだけ。この辺りに住む人たちの生活の実態が感じられる。

鹿島瀨 (かしまなだ)、駅名から「鹿島瀨が望める」のではないかと勝手に想像してきたが、海が見えるわけではない。東側の遠望はたしかに「この先に海がある」と感じさせそうな景色ではあるが。

キャベツ畑とニンジン畑がいくつもいくつも・・・。

大洋 (たいよう)、その昔田舎暮らしを目指して都会から移住する人を受け入れる村として有名になった大洋村、町村合併により今では鉾田市になっている。ここも荒野台付近の車窓に見えたのと同様に、新しいモダンな家と豪華な旧家とが点在するのが見える。いたずらによるものか経年変化かはわからないが、駅の表示の文字の一部が消えてしまってなんとも面白い状態になっていた。(右写真)



北浦湖畔 (きたうらこはん)、

その名の通り北浦の北端の湖畔に駅が建っている。やはり水辺の景色は落ち着きがあっている。

北浦湖畔を過ぎると西に筑波山の双耳峰が見えてきた。(右写真)

切通しのような所や防風林と思われる大きな林の陰になることが多く、景色を楽しませてくれるチャンスはなかなか多くならない。



新鉾田 (しんほこた)、徳宿 (とくしゅく)と進むにつれて筑波山は少しずつ形を変えて、鹿島旭 (かしまあさひ)に着く頃には頂は双耳から一本歯に変わり、やや平坦な山に化けてしまった。

澗沼 (ひぬま)、駅は沼の南端の入り江にある。しじみの産地として有名なところで、一度車で来たことがあるが、列車の窓から見るのもまた格別なものだ。澗沼全体の大きさを実感できるアングルになるので、気持ちの良い風景の広がりを楽しむことができる。

大洗 (おおあらい)、12時49分この列車の終着駅。大洗と言えば漁港近くの魚市場や海鮮食堂群を想像するが、何と駅前には店が何もない。海岸線

までは坂道をかなり下って行かなければならない。マリンタワーの頭頂部だけが見えるのでその距離と高度差がわかり、行くのは止めた。仕方なく駅舎の中にある食堂に飛び込んで昼食。「海鮮うどん¥350」という表示につられて注文してみたら、うどんの上にワカメと小さな干しホタテが二つ入っていた。特に印象に残る食事ではなかったが、オーナーの男性がやけに愛想が良いのと値段が¥350であることとで納得と満足を

感じた昼食だった。食後の散歩にふさわしいポイントもなさそうなので、13時33分発水戸行に乗車。大洗を出てしばらくすると進路をこれまでの北から北西に変えて、海からはどんどん遠ざかり水戸の街の風を感じながら走るようになる。常澄(つねずみ)を過ぎて東水戸道路を潜り抜けると高架を走る車窓からは工業団地・病院・ニュータウンなどが並び東水戸(ひがしみと)に到着。

やがて右手の常磐線の線路に吸い込まれるように合流して行くと水戸(みと)駅。

13時51分に到着。水戸は茨城県の県庁所在地、駅頭に立ってびっくりした。

お店の入り口に若い女性の裸像(坐像)が飾ってあるコンビニエンスストアに驚いたが、近づいてみるとマスクをしているではないか。「インフルエンザの流行が危惧される」と報道されたのが数日前のこと、水戸人の洒脱さを見た感じがして思わずうれしくなった。(右写真:ファミリーマート水戸駅北口店の入り口)

水戸駅周辺をふらついた後、15時03分発上野行に乗り込んだ。勿論各駅停車。

仙波湖・吾国山・筑波山・牛久沼などなど・・・チョコレートをかじりお茶を飲みながらの車窓の旅。やがて行く手に沈む太陽、北千住付近でビルとビルの間に見えた影絵のような富士のシルエットがこの旅のフィニッシュにふさわしい眺めとなった。



以上

◆文中の鹿島臨海鉄道大洗鹿島線の路線図は、該社のwebより引用しました。 <http://www.rintetsu.co.jp/>